

ドイツにおける幼児期の **Bildung** をめぐる取り組み

—ハンブルクおよびノルトライン・ヴェストファーレン州の保育施設訪問から—

中西さやか*

名寄市立大学短期大学部児童学科

【要旨】 幼児期の学び (learning) という課題は、現在世界各国に共通するものとなっている。本稿では、そのような課題に対するドイツの取り組みについて報告・考察する。具体的には、幼児期のBildung理解の一つである自己形成としてのBildung理解に基づく保育を展開している保育施設 (ハンブルクおよびノルトライン・ヴェストファーレン州) への訪問の成果を報告する。

キーワード: ドイツ, Kita, Bildung, 自己形成, 幼児期の学び

1. はじめに

1. ドイツにおける幼児期の Bildung をめぐる動向

近年、知識基盤社会における生涯学習の観点から、幼児期からの一貫した学び (learning) の必要性が提起されている (OECD 2001)。そのことを背景として、現在世界各国では知的教育や学びに主眼を置く保育・就学前教育改革が行われている。泉 (2008) は、このような動向について、これまで「遊び」を通じた情緒・社会性の発達を中心に語られてきた幼児期の子どもの発達を「学び」の視点でとらえ直そうとする試みであると述べている。

このようなことは、近年のドイツにおいても課題となっている。具体的には、2001年の「PISA ショック」以降、学力問題への対応として、幼児期における言語能力の育成および基礎学校との接続の改善を柱とする保育・就学前教育改革が行われている (小玉 2008)。このような改革の中で、議論の焦点となっているのは、幼児期の子どもの「Bildung (ビルドゥング)」の在り方である。

Bildung は、「陶冶」「人間形成」「教養」「教育」などの訳語が充てられる多義的な教育学概念である一方 (今井 2009)、学校教育や「知識の詰め込み」のようなニュアンスを込めて用いられる語でもある (OECD 2004, 鳥光 2011)。従来、Bildung は学齢期

以降を対象とする文脈の中で議論されており、保育分野において Bildung が中心的課題として検討されることはほとんどなかったという (Textor 1999)。現在では、学力問題や就学準備の要求を受けて、幼児期の子どもの Bildung とは何か、という観点からの議論が盛んに行なわれている。

2. 自己形成としての Bildung 理解について

幼児期の Bildung 理解をめぐっては、いくつかの理解が存在するが、「自己形成 (Selbstbildung)」と「共同構成 (Ko-Konstruktion)」という2つの Bildung 理解が二大勢力となっている^[1]。前者は、Bildung を子どもの内面的な世界構築を通じた自己形成と捉える子ども中心のアプローチであり、能力 (Kompetenz) 発達を志向するアプローチからは問題視されるものである (Drieschner 2010)。後者は、Bildung を社会的な相互作用の帰結として考える社会構成主義的な Bildung 理解であり、特に「メタ学習スキル (「学習の学習」)」、「レジリエンス」、「移行スキル」の育成に重点が置かれている (Oberhuemer 2004)。

筆者はこれまでの研究の中で、自己形成としての Bildung 理解に着目し、代表的論者の一人であるシェーファー (Schäfer GE) の Bildung 論について検討してきた (中西 2012, 2013)。本稿では、そのような理論的検討を踏まえ、自己形成としての Bildung 理解が実際の保育においてどのように具体化されているのかについて検討するために、2013年9月に行ったドイツ (ハンブルクおよびノルトライン・ヴェストファーレン州) の保育施設訪問の成果を報告する。

2013年12月10日受付：2014年2月18日受理

* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : snakanishi @nayoro.ac.jp

II. 保育施設 Kita における Bildung をめぐる 取り組み — ハンブルクおよびノルト ライン・ヴェストファーレン州訪問記

ここでは、まずドイツの保育施設の概要について触れた後、保育施設訪問について報告する。

1. ドイツの保育施設 Kita について

ドイツの保育施設には、3歳未満児を対象とするクリッペ (Krippe)、3歳から就学までを対象とする幼稚園 (Kindergarten)、7歳から12歳を対象とする学童保育所 (Hort) があるが、近年では、これらを総合した「Kita (キタ: Kindertagesstätte)」と呼ばれる保育施設が増加している。

これらの保育施設の使命は、「Erziehung (訓育・教育)、Bildung, Betreuung (保護)」という3つの概念で表わされており (児童・青少年援助法第22条)、これら3つの概念は、子どもの生活の中で相互に密接に結びついたものとして理解されている (OECD 2004)。このような理念の下、保育施設では、就学準備のための学問的スキルの獲得ではなく、インフォーマルな生活の中での社会的・情緒的発達を志向する社会的学習 (Sozial Lernen) に重点が置かれてきたという (Oberhuemer 2004)。

しかし、近年では、学力問題を背景として、保育施設の役割は、Bildung を中心とするものへの転換を迫られている (鳥光 2011)。このような動向については、「保育の学校化」「幼児教育の知的教育重点化」という表現もなされているが (小玉 2008)、単なる早期教育や学校教育の前倒しではなく、幼児期にふさわしい知の在り方を模索する動きを見て取ることもできる。その一つが、シェーファーらによる自己形成としての Bildung 理解とそれに基づく取り組みである。

2. ハンブルクおよびノルトライン・ヴェスト ファーレン州の Kita 訪問から

筆者は、2013年9月1日から9月8日までドイツに滞在し、ハンブルクおよびノルトライン・ヴェストファーレン州 (以下、NRW 州) の Kita を訪問した。以下に訪問の詳細を示す。

1) 訪問の経緯

今回、自己形成としての Bildung 理解が実際の保育においてどのように具体化されているのかという関心から、まずシェーファー氏本人に連絡を取った。

その結果、シェーファー氏がかかわっているハンブルクの施設 SOAL^[2]の紹介を受けた。その結果、SOALの所長クラウス・リッヒェルト氏が、ハンブルクの Kita 訪問のコーディネートを引き受けてくださった。SOAL は、保育者の継続教育や Kita の質発達のためのプログラムを有しており、ハンブルクの Kita のマネジメントを行なっているとのことだった。SOAL の質発達プログラムは、シェーファー氏の Bildung 論を理論的基盤としている。

また、シェーファー氏は2003年版のNRW州の Kita のための教育要領 (Bildung 計画) の作成を行なっている (Schäfer 2005)。そのような Bildung 計画にもとづく保育を視察したいという思いから、ドルトムント工科大学のリリアン・フリード氏に協力を依頼した。その結果、日程の都合から同大学のアンジー・レメリアート氏がコーディネートを引き受けてくださった。

以上のような経緯により、ハンブルクおよびNRW州の Kita 訪問が実現した。

2) 日程と訪問園のプロフィール

訪問の日程と訪問園のプロフィールは以下の通りである。

① Kindertagesstätte Susettestrasse e.V. (ハンブルク)

訪問日: 2013年9月2日 10:00-11:30

訪問者: シェーファー氏, クラウス氏, 中西

3-6歳の子どもが34名在籍している。開園時間は8:00-15:00。保育者は4名おり、実習生が半年間そこに加わっている。クラスはないが、いくつかの小グループに分かれている。

② Schatztruhe e.V. (ハンブルク)

訪問日: 2013年9月3日 13:30-15:00

訪問者: アンゲリカ・フォン・ビーク氏 (SOAL), 中西

1-7歳までの子どもが65名在籍している。開園時間は9:00-17:00。乳児保育は、2013年1月から開始された。学童保育 (13:00-17:00) も行われており、6-12歳までの子どもが約23名在籍している。移民的背景を持つ子どもが数多く在籍している。

③ FABIO Familienzentrum (NRW 州ドルトムント)

訪問日: 2013年9月5日 9:00-11:00

訪問者: レメリアート氏, 中西

0-就学までの子どもが70名在籍している (35名は短時間保育, 45名は長時間保育)。保育者は12名。開園時間は7:00-16:15。

④ Integrative Kindertagesstätte Werl-Nord e.V. (NRW)

州ヴェルル市)

訪問日：2013年9月6日 13:30-15:00

訪問者：レメリアート氏、中西

0-就学までの子どもが70名在籍している。開園時間は7:00-17:30。統合保育が行われている。

3) 視察内容

ここでは、Kitaで視察した内容について、いくつかの観点から整理したい。

①Bildung 領域と結びついた環境構成

訪問した Kita では、保育室に加えて、食事の部屋、お昼寝の部屋、アトリエ、工房、運動、構成の部屋など、多様な部屋が設けられていた。

これらの中には、各州の Bildung 計画に定められている Bildung 領域 (2003 年度版の NRW 州 Bildung 計画では、「運動・遊びと造形」、「メディア」、「言語」、「自然環境・文化的環境」との対応関係を感じさせるも



写真1：アトリエで絵を描く子どもたち(訪問園①)



写真2：運動の部屋(訪問園②)

のが多かった。また、部屋だけではなく、Bildung 領域に対応したコーナーも設けられていた。

Integrative Kindertagesstätte Werl-Nord e.V. (訪問園④) の園長によれば、部屋やコーナーだけでカバーしきれない Bildung 領域については、プロジェクト活動で補っているということだった。特に NRW 州の Kita では、その環境がどの Bildung 領域に結びついて

②子どもの活動形態(自由遊び、プロジェクト活動)

子どもの活動は、朝の集まりや食事を除いては、基本的に自由遊びである。どこで遊ぶか、何をして遊ぶかは子どもの選択に委ねられている。自由遊びに加えて、少人数でのプロジェクト活動も行われている。Schatztruhe e.V. (訪問園②) では、果物と肉が腐っていく様子を数か月に渡って観察するプロジェクトが行われていた。この園では、長時間保育を利用している子どもがプロジェクト活動に参加することが多いということだった。

③ドキュメンテーション

自己形成としての Bildung 理解に基づく保育では、観察とドキュメンテーションが重要な保育者の専門性の一つとして位置づけられている (Schäfer 2005, Schäfer and Alemzadeh 2012)。

今回の訪問では、保育者がどのように観察を行っているのかを見る機会にはなかったが、一人ひとりの成長を記録したポートフォリオがどの園にも置かれていた。子どもたちは、これらを自由に手に取って見ることができる。内容としては、写真が中心と



写真3：「メディア」のコーナー(訪問園③)



写真4：ポートフォリオ

なっていたが、中には、細かなエピソードが記録されているものもあった。

また、Integrative Kindertagesstätte Werl-Nord e.V. (訪問園④) では、ポートフォリオに加えて、保育者が記録し保管している「Bildung ドキュメンテーション」を見せていただいた。Bildung ドキュメンテーションでは、子どもの発達のチェックリストや言語能力テストの結果、子どものエピソードなどが記録されていた。その他に、園のポートフォリオなど、細かな記録が数多く作成されている様子だった。

④子どもの経験を捉える視点

Kindertagesstätte Susettestrasse e.V. (訪問園①) への訪問の際、雨の中、雨具をつけて遊ぶ子どもたちがいた。子どもたちは、木材を使って、家の屋根の部分を作ろうとしていた。しかし、うまく固定することができず、試行錯誤する様子が見られた。その後、砂を使って木材の隙間に埋めることで、屋根を固定することができた。

このとき同行していたシェーファー氏、リッヒェルト氏は、子どもたちが木材で屋根を作るために、角度を変えたり、木を組み替えたり、砂を使うことを思いつく様子を観察しながら次のようなことを話してくれた。このような日常のなかの小さなことの中でも、子どもたちはさまざまな探究や構築、選択などを行っており、そのようなプロセスそのものが自己形成であるということだった。ただ子どもたちが屋根を作って遊んでいるというだけではなく、その中に見られる子どもの内面的な思考や構築プロセスに目を向けることの重要性を繰り返し話されていたのが印象的であった。

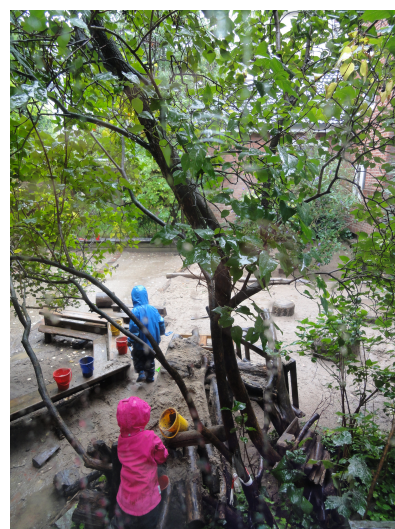


写真5：雨の中遊ぶ子どもたち（訪問園①）

シェーファー氏は、子どもの自己形成を捉える視点として、「自己形成ポテンシャル (Selbstbildungspotenziale)」を提示している (Schäfer 2005, Schäfer and Alemzadeh 2012)。自己形成ポテンシャルとは、個々の子どものバイオグラフィー (生活経験) が、その子のものの見方や思考の枠組みを形作っているという観点に立ち、子どもの思考や世界経験の内面化のプロセスを捉えようとするものである^[3]。上記のエピソードは、実際の子どもの姿から自己形成を捉えることに関するものであったと考える。

III. おわりに

今回の訪問からは、自己形成としての Bildung 理解に基づく保育の輪郭を知ることができた。自己形成という見方は、子どもに何かを教え込むのではなく、子どもがあらかじめ持っているものを起点とするアプローチである。そこで重視されるのは、子どもの自己活動、子どもの思考や内面化のプロセス、探究しながら学ぶこと、子どもの自己形成を支える保育者の存在である (Schäfer 2005)。子どもの感覚や探究を喚起するような環境構成やプロジェクト活動、ドキュメンテーションなどは、このような Bildung 理解を反映したものであるといえよう。

しかし、政治的な要請として Bildung に重点を置くことを求められるようになった保育現場では、必ずしもこのような Bildung 理解 (原理) が浸透しているわけではないように感じる部分もあった。たとえば、NRW 州の Kita では、Bildung 計画施行後の変化について質問したところ、「ドキュメンテーションは非常に重要なことであるが書類作成などの事務作業が増

えた」という声があり、保育内容に関する返答はなかった。また、これまでやってきた保育や活動を各 *Bildung* 領域に当てはめて解釈する傾向や、遊具や遊びのコーナーにそこで育つもの(創造性、社会性等)が掲げられている様子なども見られた。

以上のように、保育現場では戸惑いも見られたものの、学力や就学準備という要求に対して、自己形成という観点から幼児期の子どもの知や学びの在り方を捉えようとする試みそのものは、注目に値するものであると考える。自己形成としての *Bildung* 理解と保育実践の結びつきについては、今後さらに検討を進めていきたいと考えている。

脚 注

- [1]この2つの *Bildung* 理解の詳細については、中西さやか(2013)保育における子どもの「学び」に関する検討—シェーファー(Schäfer, G.E.)の自己形成論としての *Bildung* 観に着目して—。保育学研究 51 3:6-14.を参照。
[2]SOALについては、SOALホームページ(<http://www.soal.de/>)を参照。
[3]自己形成ポテンシャルについては、中西 2013 において詳細を示している。

謝 辞

施設訪問に際してご協力いただいたシェーファー氏、リッヒェルト氏、SOALのみなさま、フリード氏およびレメリアート氏、温かく迎えてくださった訪問園のみなさまに心より感謝申し上げます。

文 献

Drieschner E (2010) *Bildung als Selbstbildung oder Kompetenzentwicklung? Zur Ambivalenz von Kind- und Kontextorientierung in der frühpädagogischen Bildungsdebatte.* (Gaus D, Drieschner E Hrsg.) *'Bildung' jenseits pädagogischer Theoriebildung? Fragen zu Sinn, Zweck und Funktion der Allgemeinen Pädagogik.* S.183-220. VS Verlag, Wiesbaden.

- Oberhuemer P (2004) Controversies, chances and challenges: reflections on the quality debate in Germany. *Early Years*, 24 1:9-21.
- OECD (2001) *Starting Strong. Early Childhood Education and Care.* OECD publishing, Paris.
- OECD (2004) *Die Politik der frühkindlichen Betreuung, Bildung und Erziehung in der Bundesrepublik Deutschland.* Ein Länderbericht der Organization für wirtschaftliche Zusammenarbeit und Entwicklung.
- Schäfer GE (Hrsg.) (2005) *Bildung beginnt mit der Geburt.—Ein offener Bildungsplan für Kindertageseinrichtungen in Nordrhein-Westfalen.* Cornelsen Verlag Scriptor, Berlin · Düsseldorf · Mannheim.
- Schäfer GE, Alemzadeh M (2012) *Wahrnehmendes Beobachten.— Beobachtung und Dokumentation am Beispiel der Lernwerkstatt Natur.* Verlag das netz, Berlin und Weimar.
- Textor MR (1999) *Bildung, Erziehung, Betreuung. Kindergartenpädagogik—Online—Handbuch.* <http://www.kindergartenpaedagogik.de/127.html> (2012年8月20日閲覧)
- 今井康雄(編)(2009)教育思想史. 有斐閣.
- 泉千勢(2008)あとがき:子どもの発達を学びの視点で捉え直す。(泉千勢, 一見真理子, 汐見稔幸編著)世界の幼児教育・保育改革と学力. p.360-365. 明石書店.
- 小玉亮子(2008)PISAショックによる保育の学校化—「境界線」を越える試み。(泉千勢, 一見真理子, 汐見稔幸編著)世界の幼児教育・保育改革と学力. p.69-88. 明石書店.
- 鳥光美緒子(2011)【ドイツ】ドイツの保育政策と陶冶の概念 Child Research Net. <http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/35.html> (2012年2月16日閲覧)
- 豊田和子(2011)ドイツの幼稚園における「教育の質」をめぐる議論と成果—Tietzeら(ベルリン自由大学研究グループ)を中心に—. 保育学研究 49 3:29-40.